Shape of Things Human

人形式モナリザ

換言すると
「役に立たない」人工物は、
それが物体であれ情報であれ、
目的物であれ手法であれ、
ほぼすべて
悪魔と神に関わっているからだ。

森博嗣

MORI
Hiroshi

人形式モナリザ

博嗣

講談社ノベルス
ODANSHA NOVELS

EYE LOVE EYE

視覚障害その他の理由で活字のままでこの本を利用出来ない人のために、営利を目的とする場合を除き「録音図書」「点字図書」「拡大写本」等の製作をすることを認めます。その際は著作権者、または、出版社までご連絡ください。

N.D.C.913　282p　18cm

人形式モナリザ

一九九九年九月五日　第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者―森博嗣

発行者―野間佐和子

発行所―株式会社講談社

© HIROSHI MORI 1999 Printed in Japan

東京都文京区音羽二-一二-二一
郵便番号一一二-八〇〇一

編集部〇三-五三九五-三五〇六
販売部〇三-五三九五-三六二六
製作部〇三-五三九五-三六一五

印刷所―廣済堂印刷株式会社　製本所―株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-182092-3（文三）

¥800-

Shape of Things Human

人形式モナリザ

換言すると
「役に立たない」人工物は、
それが物体であれ情報であれ、
目的物であれ手法であれ、
ほぼすべて
悪魔と神に関わっているからだ。

森博嗣

MORI
Hiroshi

ISBN4-06-182092-3

C0293 ¥800E (0)

1920293008004

人形式モナリザ

森 博嗣

定価：本体800円（税別）

避暑地に建つ私設博物館「人形の館」。そこに常設されているステージで、衆人環視の中「乙女文楽（おとめぶんらく）」の演者が謎の死を遂げた！　被害者の一族では、二年前にも、新婚の青年が殺されていた。悪魔崇拝者だった彼は、「神の白い手」に殺されたのだと、若き未亡人は語るのだが!? ラストの一行で、読者を襲う衝撃の真実！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

人形式モナリザ

博嗣

講談社ノベルス
ODANSHA NOVELS

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーデザイン＝辰巳四郎

目次

プロローグ　大よろこびする優しい雷鳴、夜の支配者――――11
第１章　浪費、曙光、そして過度に細心な幽霊――――23
第２章　魔法、あるいは不気味な笑劇――――69
第３章　奇跡の大漁、喧騒、そして愛――――105
第４章　さてここで死者たちの空無さを当てにする者――――147
第５章　肉体培養、あるには――お望みなら死を――――186
第６章　沈黙にさそわれ、扉はあとずさりしながらひらく――――232
第７章　その微笑にはひかえめな優雅さがあるだろう――――266
エピローグ　おわり　そして　つづき――――276

SHAPE OF THINGS HUMAN

by

Mori Hiroshi

1999

登場人物

人形博物館の関係者

岩崎　達治……人形コレクタ、５年前に死亡
岩崎　雅代……達治の妻、乙女文楽の師
岩崎　毅……達治の息子、人形博物館館長
岩崎　巳代子……毅の妻、乙女文楽継承者
岩崎　亮……毅の息子、２年前に死亡
岩崎　麻里亜……亮の妻
江尻　駿火……彫刻家、５年前に死亡
明智　幸治……地元の代議士
中道　豊……画家
中道　千沙……豊の妻、雅代の孫
千葉　和子……岩崎家の家政婦

「美娯斗屋」の人々

大河内　弘樹……美娯斗屋の主人
大河内　優美……弘樹の妻、雅代の孫、千沙の姉
大河内　翔子……弘樹の娘
小鳥遊　練無……バイトの大学生
森川　素直……バイトの大学生
保呂草　潤平……探偵、便利屋
香具山　紫子……大学生
瀬在丸　紅子……自称科学者

その他の人々

林……紅子の先夫、愛知県警刑事
祖父江　七夏……愛知県警刑事
本間……長野県警刑事
根来　機千瑛……瀬在丸家の執事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

こころしたまえ、

人の記憶にとどまるかぎり、百頭女はかつて一度なりとも、
再増殖の幽霊と関係したことはない。
これからもそうはならないだろう。
――むしろ、露のなかにひたされて、
凍った菫の花を糧とすることだ。

(LA FEMME 100 TÊTES ／ Max Ernst)

プロローグ　大よろこびする優しい雷鳴、夜の支配者

彼を救いたかった。
愛していたから。
彼を助けたかった。
お腹の中の子供のためにも。
私は……。

酔っていたのか、
それとも、魔法だったのか、
わからない。
彼は、でも……、
もう人間ではなかった。

人間の形をした、別の存在。

そう……、
彼自身の口から、私は聞いた。
「僕はね、麻里亜、魂を売ろうと思っている」
「売る？　誰に」
「力のある存在に」
彼は微笑んだ。
人間のように微笑んだ。
まるで人間のように微笑んだ。

私は、恐かった。
だから、彼の言葉を信じた。
疑う余裕さえなかったから。
けれど……、
彼は、私が信じたことを疑った。
だから？
だから……、

あんなことに……。

口から吐き出した煙。
白い煙は、たちまち部屋いっぱいに立ち込める。
充満する。
そして、
彼は、大きな悪魔を呼び出した。
煙の中から。
彼がその名前を呼んだ。
名前？
私には口にできない。
それを口にしてはいけない。
恐ろしくて、
私は、動けなかった。
息もできなかった。
私のすぐ目の前まで、悪魔は顔を近づけた。
獣のような大きな口。
真っ赤な血が滴り落ちている。

笑ったのだ。
低い、空気が振動するような声で、
笑った。
悪魔が笑っているその横で、
彼はじっと私を見据えている。
目を細め、私を軽蔑するように見ている。
私にはもう価値がない。
人間にはもう価値がない。
だから、
消してしまっても良い。
恐い。
だから、
私は、堪えられなくなって、目を瞑る。
「お願い……」
「どうしたんだい？」
「わかったわ」
「何がわかったのかな？」
「ええ……、貴方を信じます」

「もちろん、信じてもらわなくちゃあね。それが大事だ」
「でも、亮さん……」
「なんだい？」
「何のために、こんなことをするの？」
恐る恐る私は尋ねた。
しばらく彼は返事をしなかった。
私は目を開ける。
すると、もう悪魔はいなかった。
部屋の煙もみるみる消えていく。
「何のために？」
彼は恐い顔をしていた。
私をまだ睨んでいる。
質問などしなければ良かった、と私は思う。
彼は口から白い煙を吐いた。
私は、また恐くなる。
でも、今度は何も起きなかった。
彼は、椅子に深く腰掛けて、相変わらず煙草を吸っている。肘掛けから垂れた片手が、軽く揺れていた。
「僕はね、強くなりたいんだよ」
「どうして？」
「たぶん……、そう、いろいろなものが恐いからだろう」
「何が恐いの？」
「みんな恐い。すべてが恐い。恐いものばかりだ。家族の皆も、恐ろしい。友人も全部恐ろしい。知っている人も、知らない人も、誰もかも恐い。人間ってやつは、どいつもこいつも、みんな恐ろしい。よくよく見ると、もう顔も躰も、形が恐い。気持ち悪い。鏡を見ると、自分だって恐い。とても見ていられない」
彼は早口になる。
私は、短い断続的な呼吸を繰り返していた。
緊張して、喉が痙攣していたのかもしれない。
空気が不足しているような、焦りもあった。

それなのに、
何故か、意識はずっと遠くのとても安全なところにいるという錯覚があって、今にも眠ってしまいそうだったのだ。
頭を振って、目を凝らす。
もう一度、彼を見ると、今度はその顔が泣いているようにも見えた。

どこだっただろう……。
あれは、どこだったのか。

できたばかりの新しい部屋だった。
真新しい匂いがした。
確か……、外は細かい雨。
そう、雨が降っていた、と思う。
冷たい湿った空気が、開いたままだった窓から液体のように壁を伝って侵入する、分厚い生地のカーテンが、夢の記憶に接触するスパークのように、僅かに震えていた。
ゆらぎ。
にじみ。
かすり。
ふるえ。
繰り返し。
呼び戻し。
弾け飛び。
一瞬、私自身の姿を見た。
次の瞬間には、未来と過去を同時に見た。
ここは？
今は？
私？
部屋の中にいる。
季節は、初夏。
彼と私と。
「麻里亜、外に出ようか」
彼に手を引かれ、私はソファから立ち上がった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong